

## 公家町のガラス

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



出土したガラス製品 右上がアルカリガラス、その他は鉛ガラス

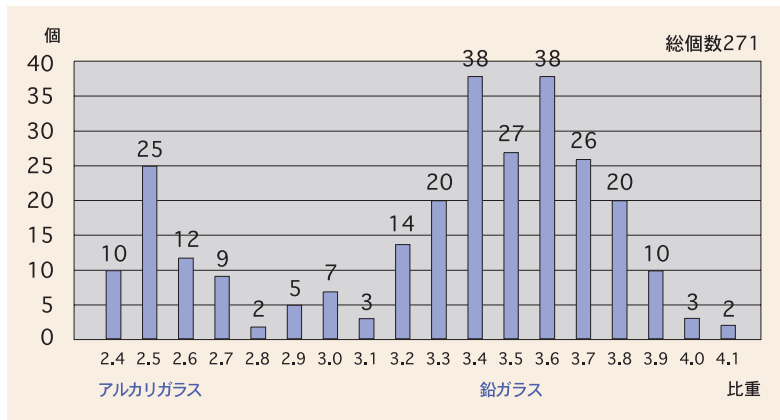
はじめに 1998～2002年の5年間、京都御苑内で和風迎賓施設建設にともなう調査を実施しました。その際、公家屋敷跡から様々な遺物とともに、脆くて色鮮やかなガラス製品が数多く出土しました。

古くは中近東・エジプトあたりで作られ始めたといわれるガラスは、日本でも弥生時代から知られ、成形が容易で、宝石のような光沢をもち、色調が多彩なために昔から人々を魅了してきました。

出土したガラスを見ると、江戸時代の公家の人たちも輸入・国産を問わず、様々なガラス製品を手し利用したようです。種類としては、飲食器・瓶・酒器・装飾品・玩具・灯火具など色々なものがありました。

今回は多量のガラス製品と思われるものの中から、700点あまりを調査・分析しました。その内訳はアルカリガラス153点(21.8%)と鉛ガラス548点(78.2%)で、

その他水晶2点・琥珀1点がありました。ガラス製品の約52%は髪飾りを主とする棒状の製品でした。それ以外にワインボトル6%、他の瓶6.1%、酒杯5.8%、板状3.7%、グラス類3%、土瓶形のチロリ1.6%、ランプの火舎<sup>ほや</sup>1%、その他20.8%などがありました。その中には、国産のチロリの蓋(上写真の1 比重3.8)・雑道具のグラス(同3 比重3.8)・グラス(同4 比重3.4)イギリス製



ガラスの比重別個体数（18世紀末～19世紀中頃）

のデカンターの栓（同2 比重2.5）など、伝世品と同型のものがありました。

**ガラスの比重** ガラスは主原料に石粉（石英等の粉）を用います。低温で溶かしやすくするためにアルカリ（ソーダ・カリ）を加えたアルカリガラスと、鉛を加えた鉛ガラスに大別できます。ガラスに鉛が含まれると、比重値が大きくなります。そこで、比重を測定すれば、そのガラスが鉛ガラスかどうか大まかに判別できます。

これまでの調査で、江戸時代に製造された国産の伝世品のガラスは鉛ガラスで作られ、同時代の文献に記された調査も鉛ガラスの系統であることが分かっています。したがって江戸時代のアルカリガラスは、国産ではなく国外で作られたものといえます。

今回出土したガラスの比重値には、アルカリガラスの2.5前後と鉛ガラスの3.5前後にピークがあります。そのうち、18世紀末から19世紀中頃の遺物と共伴するガラスでは、上のグラフに見られるように、アルカリガラスと鉛ガラスに大きなピークがあり、それ以外にも3.0のあたりにわずかにピ

ークが見られます。アルカリガラスが2.5に集中したピークを持つのに比べ、鉛ガラスは比重値に幅が見られます。これには、生産地の増加や製造法の多様化が考えられます。また、比重値3.0前後については、今後の検討が必要と思われる。

**乳濁したガラス** 透明性が責ばれたガラスの中で、不透明で乳濁した一群がありました。比重値はアルカリガラスの2.5前後であり、国産のガラスでないことはわかりました。さて、国外のどこで生産されたのでしょうか。

その当時、中国は清の時代で、瓶・皿・嗅ぎ煙草入れである鼻煙壺<sup>びえんこ</sup>など、不透明なガラスを使用した製品が大量に生産されています。

特に雍正帝の時代(1723～35年)には、宝石に替えて正式に制度に取り入れられ、官吏の帽子飾りにも使用されるほど珍重されています。また、乾隆帝の時代(1736～95年)のガラス器は乾隆ガラスと呼ばれ、不透明素地に色ガラスを被せて浮彫りを施したものですが、その比重は2.3～2.5で、アルカリガラスの値を示しています。長崎の調査でも同類のガラスが出土し中国製と推定されています。これらのことから、不透明な乳濁したガラスは中国で製作された可能性が高いと思われます。

おわりに 今回出土したガラスは、京都市内の他の発掘調査で出土したものを質・量ともに圧倒的に上回り、公家屋敷では、いかにガラスが好まれていたかがうかがえます。ヨーロッパ・中国の製品は長崎を通じて、国産品は長崎・大坂・京・江戸などの生産地から入手していたのでしょうか。

公家たちは、伝統を重んじる生活を基本にしながらも、常に広角な視点を持ち、時代の先端を取り入れていたのではないのでしょうか。  
(竜子 正彦)



乳濁したガラス製品 左端が杯、その他は髪飾り